



TITLE:

# 小王子に関する一考察

AUTHOR(S):

萩原, 淳平

---

CITATION:

萩原, 淳平. 小王子に関する一考察. 東洋史研究 1959, 17(4): 481-498

ISSUE DATE:

1959-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148123>

RIGHT:

## 小王子に關する一考察

萩 原 淳 平

まえがき

小王子とは言うまでもなく、明代後期にモンゴリアで活躍した一連の部族長の總稱である。この小王子は後に有名なダヤン・カン、アルタン・カンに直接・間接に續くものであつて、その一族がやがてモンゴリア全域を支配することになる。このため小王子の究明は明代蒙古史研究には、必要かくべからざる問題である。しかるに小王子に關する史料は種々錯雜して、甚だ不明な點が多いためか、これまで研究されたものは少ない。ただその中にあつて、和田博士は「内蒙古諸部落の起源」と「兀良哈三衛に關する研究」を著して、この難問題に關しても最もすぐれた見解を發表されたのである。

しかるに私も京都大學文學部編「明代滿蒙史料」の編纂

事業に加わつて、小王子に關する史料を取扱つた結果、これまで和田博士が述べてこられた説とは多少異つた結論に到達した。特に和田博士は、小王子はタタール（韃靼）の子孫なりという立場から、小王子とオイラート（瓦剌）との對立關係を強調して、明初のタタールとオイラートとの關係に結びつけられているように見受けられる。しかるにエセン死後のモンゴル社會にあつては、小王子の性格が明初のタタール部族とは異つたもののように私には考えられる。ただ小王子の活躍した年代は、約百年にも及ぶので簡単に結論づけるわけにはいかない。そこで本稿では小王子の性格をやや特徴づける成化・弘治時代を對象とした。この時期は小王子がモンゴリアを統一する出發點と考えられる重要な時期でもある。

なお和田博士の研究によれば、この時代の小王子は所謂ダヤン・カンにあたるのであるが、部分的には別に私見もあり、いずれ觸れる機会もあらうと思ふから、ここでは、單に明實錄にしたがつて小王子として述べる。

# 一

小王子という文字が明實錄にあらわれるのは成化半ば以後としては、十七年五月己亥を以て最初とする。

虜中逸歸者傳報、虜酋亦思馬因等、竊議、與小王子連兵、欲寇大同等邊。

とある。これにつづくものとしては十九年五月の記事があげられるが、いずれも小王子の活躍はイスマイル（亦思馬因）との關係においてあらわれることが特徴である。また小王子の記事は比較的少ないが、イスマイルだけに關する記事は豊富である。したがつて小王子の動靜を知るためには、まずイスマイルの活躍狀態を究める必要がある。その主なものを拾つてみると、成化十五年五月庚午に、

福餘衛都指揮扭歹等奏報、迤北乩加思蘭爲其族弟亦思馬因所殺。

とある。乩加思蘭は智術あり用兵も巧みで、初めは僅三四

百人の部下を率いていてトルファン方面で朝貢使節を襲つては荒しまわつていたが、天順の頃明朝の招撫を受けてハミ近邊に移つて來た。さらに成化の初にはオルドスに入り、ここを根據として活躍し、成化中頃にはすでにモンゴリアにあつて最も有力な部長の一人になつていた。イスマイルはこの乩加思蘭をたおして太師となつたのである。翌十六年十月壬申の記録を見ると、

朵顏衛入貢夷人歹都報、北虜亦思馬因領衆、東略泰寧・福餘二衛。又云、虜酋脫羅千行營去大同貓兒莊約五程。

兵部遂言、泰寧・福餘二衛常貢不以時至、必有其故。亦思馬因雖守臣報謂已向西北、今以此報度之、必與脫羅千相合、宜通行東北二邊守將畫謀防禦。報可。

とあるように、まず東行して泰寧・福餘二衛を攻めて東からの不安を一應解消して西北進した。この間、宣府邊外にあつてしばしば中國にも小規模の侵入を行つたが、十八年の中頃には再び東行して來た。十八年閏八月乙未の記事には、

朵顏衛夷人革克台來降言、北虜亦思馬因、與三衛阿兒乞蠻等、彼此劫奪、既而互相媾和、欲至我邊抄掠。事聞。上

論兵部臣曰、亦思馬因、糾衆沙漠、雄長諸部、日夜謀畫、欲來犯邊久矣。比復與朵顏三衛、解仇結黨、其志非小。秋高馬肥。入寇之事難保其無、縱彼不責他人兵力彼獨不能爲寇乎。其勿以傳聞之言爲不可信。宜戒緣邊守臣、務相嚴謹兵備、無或少怠墮其計中以自取失律之罪。

とある。さきの泰寧・福餘につづいて朵顏を攻略しようと思つたが思うように成功せず、講和という形をとつて明邊侵入をはかつた。これが後に問題を起すことになるが、今はイスマイルの活躍の概観に止めておく。

さて、宣府邊外から遼東地方にかけて、實際の實力者はイスマイルであつて、小王子は恐らくイスマイルと行動を共にしながらも、その陰にかくれていたのであらう。

ところが、成化十九年以後小王子の活躍が目覺しくなつて来る。その出發點としての記事は實錄十九年五月壬寅のものである。

虜酋亦思馬因<sup>?</sup>而進北小王子敗走。所遣幼稚朵顏三衛携往海西易軍器、道經遼東。巡撫都御史王宗彝等、知之議以爲馬市之設正欲革海西與三衛互市之弊。今若使其得以人口易軍器而不豫爲杜絕、他日必將糾合、以爲邊害。乃遣

譯諭之、凡携幼稚來市者賠償其直。至是以所市男女九人來獻。兵部請、如降虜處之、俟其長遣置兩廣。上命、不必遣乃以分賜司禮監太監懷恩等。

この時以後、小王子はイスマイルから獨立して一方の統率者として活躍するのである。しかしこの記事の最初にある「虜酋亦思馬因而進北小王子敗走」に關しては、從來の見解と私の研究の結果とは異つたものになつた。まずこれまでの見解を出版年月日の順にあげてみよう。

一、全邊略記（崇禎元年 方孔炤）卷十

十九年五月、虜酋亦思馬因爲進北小王子敗走。

二、五邊典則（崇禎三年 徐日久）卷一

成化十九年五月、虜酋亦思馬因爲進北小王子敗走。

三、名山藏（崇禎十三年 何喬遠）鞬韉傳

其入寇者復稱小王子、或稱把禿猛可王、即故小王子後也、與其太師亦思馬因不協相攻。亦思馬因死。

四、內蒙古諸部落の起源（大正六年 和田清）

是より後數年の間は亦思馬因の全盛時代にして明邊を侵犯し三衛を寇掠して最も威權を恣にしたるが、其專權はやがて禍因を醸して十九年遂に可汗の爲めに驅逐せらる

るに至りし如し。皇明實錄に

成化十九年五月壬寅、虜酋亦思馬因爲迤北小王子敗走、

所遺幼稚、朵顏三衛携往海西、易軍器。

と見ゆるものはれなり。

五、兀良哈三衛に關する研究(一)(昭和七年 和田清)

さて亦思馬因はかくて頗る專横を極めたが、遂に俊銳なる小王子の襲破する所となり、一族散亡してその幼稚は三衛に執はれ、海西女直に奴隸に賣られた。思ふに三衛は此の時小王子に黨して、暴横なる亦思馬因を挾撃したもののなのであらう。

實錄成化十九年五月壬寅の條に、

虜酋亦思馬因爲小王子敗走……

とあるものはなり。

以上の五説は、いずれもイスマイルと小王子が勢力争いを演じて、イスマイルの方が敗走したという見解を取っている。表現法に多少の相違はあるが、これらを要約すれば、「亦思馬因爲迤北小王子敗走」に歸することが出来る。しかも「全邊略記」と「五邊典則」とは大體明實錄を資料にして、その抄録の形を取っているとされている。また和田

博士の研究にも、「明實錄によれば」と示されている。して見ると明實錄には「虜酋亦思馬因爲迤北小王子敗走」と、あるとみななければならない。

しかるに私の調べた明實錄の鈔本には、すべて「而」とあつて「爲」は見付けることが出来なかつた。現在明實錄の鈔本は中國を始め、日本、イギリス、アメリカなどに存在するが、いずれも錯簡・脱落・誤字・脱字が甚しく、まだ全面的に信頼出来る鈔本は見あたらないようである。私の調べた鈔本というのは、「京都大學本」(内閣文庫に收藏されている二種の古鈔本明實錄を彼此綴り合わせて謄寫したもの)、「宮内廳圖書館本」、「江蘇國學圖書館本」(梁氏本)、「東洋文庫本」である。これらは我國に傳わる鈔本の一部に限られてはいるが、これまでの研究によれば、最も良い鈔本に屬する。これらが皆一致して「而」となっているから、單なる誤寫として見過すわけにはいかない。してみると、明實錄の鈔本には「而」と「爲」と二系統あるとみななければならない。しかも一字の相違で意味は全く異つてくる。この場合の「而」は「及」とか「與」という意味で、例えば、「聞善而不善、皆以告其上」(墨子尚同)の如くで

ある。これならば、イスマイルと小王子とは戦つたことにはならない。この兩説は果していずれが妥當であろうか。

字句のせんさくばかりしてみても到底解決出来ないから、前後の事情によつて判定するより外に方法はなからう。

まず最初に「敗走」に手掛りを求めて見よう。これとよく似た言葉に遠遁とか、遁去というのがこの時代に頻出する。例えば成化十九年九月甲辰のところに

鎮朔大將軍保國公朱永奏、虜酋・遠遁・近邊無警。

とある。また二十年十月辛未には

總督大同宣府軍務戸部尙書余子俊等言、虜酋・小王子今已遠遁。

とある如きである。ここで用いられる遠遁とか遁去という言葉の意味は北方民族が明軍と戦つて、敗れて逃げ去つたと云う意味ではない。むしろ戦鬪を交えた場合には、敗けるのは殆んど常に明軍であつた。およそこの頃の北方防衛軍は極めて弱體で、北方民族が侵入して來ても積極的に出戦することは殆んどなく、北方民族のなすがままにまかせていた。ただ明軍にとつて幸いなことには、當時のモンゴリアは諸勢力に分裂していたため、侵入軍の規模も小さく、

そのうえ北方の事態はもし長期にわたつて侵入すれば、他部落に根據地を襲撃されるおそれがあつたから、侵入軍に長期にわたる侵入を許さなかつた。このため侵入軍は豫定の掠奪物を得れば直ちに引きあげるのを常とした。言いかえれば彼等は要求さえ滿せば豫定の作戦行動として直ちに引きあげたのである。明側の指揮官はこの行動をとらえて、あたかも自軍の威力におされて北方民族が逃げ去つたかのように中央に報告するのである。このような報告は、都から遠く離れば離れる程誇大であり、往々敗戦が戦勝として報告された。例えば甘肅・寧夏軍が十人以上の敵を殺したと戦勝を報告してくる。中央ではこれをあやしんで調査した結果、確かに首の數だけは合致しているが、事實は敵に殺された自軍の戦死者や農民の首であつた。このような不正の報告は、實錄にもたびたび見えるところで、特に成化・弘治の頃の防衛軍報告としてはむしろあたりまえのこととすらなつていた。

ここで問題にする「敗走」も同じ事情のものに外ならない。十九年五月の記事に係あるものを求めるならば、二十年二月丙戌の記事として、

巡按遼東監察御史張西銘勅報、成化十九年三月、虜入定遠堡境、殺掠人畜、指揮千戶等官俱宜鞫問如律。備禦都指揮僉事李洪・參將周俊・少監藍瑩・按伏都指揮吳琮・王澤・遊擊將軍羅雄俱弛備玩寇復相爲隱匿、并鎮守太監韋朗・總兵官都督同知綏謙・前巡撫右僉都御史王宗彝亦各失于防察奏報不實俱宜論罪。事下。兵部言、李洪等宜逮問。藍瑩係內臣、羅雄亦管領軍追寇、乞降勅切責。韋朗・綏謙等情罪亦輕取旨裁處。上曰、藍瑩・羅雄令戴罪殺賊、韋朗・綏謙・王宗彝等姑宥之。餘如所擬。

をあげることが出来る。この事件は遼東の定遠堡（開原附近）と言う遠くに起つた事件で、防衛軍は弛備玩寇でこのため人畜の殺掠を被むる敗北であるにも拘らず、事件の真相を隠匿し出駄羅目の報告をしたのが、一年後の成化二十年になつて發覺處罰されたのである。ただこの事件には單に、虜定遠堡の境に入る、とあつて虜の實態については述べられていないが、これは先に述べた十八年閏八月乙未の記事と十九年五月壬寅の記事とも關係があると思われる。すなわち、これらを要約すると次のようになる。

成化十八年閏八月の頃東行したイスマイルと小王子の軍

は朵顏衛を攻めて戦つたが、勝敗の決するのを待たないで媾和し、明邊侵入を計つた。そのあらわれが十九年三月の定遠堡侵入である。この時明軍は敗れたにもかかわらず真相を隠匿して、間もなくイスマイル及び小王子が次期作戰のために移動したのを利用して恐らく勝利を報告し、虜酋亦思馬因而逃北小王子敗走とつけ加えたのであろう（十九年五月）。その報告の欺であるのが中央に知れて二十年二月處罰された。

と、言うことになる。十九年三月の事件と十九年五月の報告が一連のものであることは、兩文に都御史王宗彝が出て來ることからも想像される。なお十九年五月壬寅の記事の最初の部分も上奏文の一部と推定される。大體地方からの上奏文は形として、まず現状の説明をして、これでは不都合だから以下の事を乞うとなり、最後に處置が述べられる。ところが上奏文の中には前文が作者によつては非常に長いものがあつたり、他の上奏文と類似しているもの、又は下級武官などで誤つて書いたもの、或はことさらに欺つて書いたものが相當多いようである。これは實録を編纂する時にある程度書き改められる。ただ萬曆以後の實録のように

編纂に充分手を入れなかつたものには、これらの前文が殆んどそのまま入つてゐる。しかし隆慶以前のものには相當取捨選擇がなされた。十九年五月の記事も前文の不要と思われる個所が抜き取られ、最後の處置に必要な最小限の前文が見出し的に述べられたものであらう。こういう形式は、上奏文の全文をのせてある經世文編の類のものと、實錄とを對比して見れば一目瞭然である。

以上によつて虜酋亦思馬因而逃北小王子敗走の解釋は、從來とかれたように、イスマイルと小王子との戦いでなく、イスマイル及び小王子が新作戦のため遼東の開原附近から移動した事に外ならない、と言ふ解釋が一應成立し得るのではなからうか。

しからば、果してイスマイルと小王子はどのように移動したか、その裏付けを述べよう。まず小王子に關しては、敗走の記事の十一日後である十九年五月癸丑には、

鎮守大同太監汪直等馳奏、有自虜中逸歸者傳報、北虜小王子欲糾率部落大舉復讐。恐衆寡不敵。

とあり、小王子はすでに新作戦に移つてゐることがうかがえる。六月庚辰には、

大同總兵官都督同知許寧等奏、比得降虜言、虜酋小王子等擁衆近邊、密遣人覬入寇之路、及大同東中西三路俱有虜報、恐地方廣漫、兵力不足。

とあつて、小王子軍は開原を去つて、すでに大同近くに來てゐることがうかがえる。翌七月に入ると乙未の記事には、大同總兵官許寧等奏、分守左參將劉寧・左監丞石岩被命至陽和、又二日、虜入其境、殺掠人畜。……

とあり、先鋒隊と思える小部隊の侵入がこれからしばしばあらわれる。同月の戊申になると、機熟していよいよ本隊の侵入が報ぜられてきた。すなわち、

宣府總兵官周玉・巡撫都御史秦紘等馳奏、十三日准大同總兵官許寧等報、煤峪口等處虜賊萬餘、越山而南、大肆劫掠。寧等督兵、與戰數合、比暮斂兵相持。翌日虜復以三萬餘騎突至、與之鏖戰二晝夜、勝負未決。……奏至。上曰、昨大同報、虜擁衆入境、已遣人馳視、今宣府警報復至。可見虜勢猖獗無疑矣。……

これから見ると、宣府・大同方面に今迄にない大軍が侵入を開始したことを知り得る。この全貌は同月丙辰の記事で示されている。



大同總兵官許寧等奏、虜酋小王子于本月十一日、率三萬餘騎、寇邊東西、連營五十餘里。……計連戰二日一夜、生擒一人、斬首一十七顆、獲馬五十四匹、衣甲弓箭等物九百七十餘、奪回牲畜一萬六千六百餘。我軍亦陣亡五百八十六人、被傷一千一百一人、射死馬一千七十、而石岩等亦敗虜三百餘騎于江家屯。奏至。上曰、虜大舉入寇。許寧等能以寡敵衆、追逐出境。即馳勅獎勵之俾用心謀畫、其奏捷人賞鈔一千貫。按寧等此時兵敗失利乃更以捷聞、詞多掩飾、朝廷一時未究其詳、故降勅云爾。

ここでもまた總兵官許寧は勝利を報告しているが、「按ずるに」以下の編纂者の追記でも明らかなように事實は敗戦であつた。ともあれ小王子軍の侵入がこれまでになく大規模なものであることがうかがえる。これを知つた中央政府は直ちに保國公朱永を鎮朔大將軍に任命して防戦これ努めた。八月一杯小王子軍は掠奪をほしいままにして、九月には轉戦して明邊から遠ざかつた。<sup>(6)</sup>思うに遼東から西行し、手始めに明邊を襲つて掠奪し、これからの西行の經濟的基礎を作つたものであらう。

次にイスマイルの動向について述べなければならないが、

イスマイルが明確に實錄に出て來るのは成化二十二年二月である。己卯の記事によれば、

巡撫甘肅右副都御史唐瑜等奏、……但聞虜酋亦思馬因與瓦剌連和、欲犯瓜沙二州。

とある。忽然として遠く寧夏・甘肅邊外に現れ、瓜州・沙州方面を侵そうとする様子が見える。しかも、オイラート（瓦剌）と連和している様子があるのは特に注意をひくものである。同年の六月辛卯には、

巡撫甘肅右副都御史唐瑜等奏、虜寇出沒莊浪者、多自東北而來。其寇涼永者則滿都魯部下。寇甘肅則亦思馬因等酋部下也。

とある。これから見るとイスマイルは専ら甘肅方面の經略につとめていたのである。この點から類推すると、二十一年五月辛未の、

巡撫甘肅右副都御史魯能等奏、罕東左衛地方、屢爲北虜侵掠。

とある北虜はイスマイルを指すものとも考えられる。いずれにしても二十二年二月・六月に明側に確認されているが、それ以前からイスマイルが此の方面で活躍を始めたであらう。

うことは疑いない。なおイスマイルが甘肅に出て来るまでの動靜に關しては明確を缺くのであるが、二十二年二月のイスマイルがオイラートと連和したという所に手掛りを求めることが出来る。すなわち、それよりさきの二十年三月己酉には、

兵部尙書張鵬等奏、虜中逸歸人言、瓦刺虜酋克失欲與迤北小王子連和、俟秋高馬肥、擁衆入寇。

とあり、これまた突然オイラートの克失と小王子の連和が行われていることを示している。更に翌四月辛酉には、

大通事錦衣衛署指揮使楊銘等奏、泰寧衛都督脫脫孛羅弟小失台王上言、迤北虜酋克失、遣人招降諸夷、及朵顏三衛都督阿兒吉蠻等、亦遣使察歹等、上書告急言、克失與小王子連和約束行掠。其部落、將大舉入寇。

とあり、オイラートの克失と小王子の連和はいよいよ明白である。してみると、オイラートはほぼ時を同じくして、一方では宣府・大同邊外の小王子と連和し、他方では甘肅邊外のイスマイルと連和している。この事實は時期的にまた場所的に見て、逆にすべてイスマイルの策動と見ることは出来ないであろうか。すなわち、イスマイルは（十九年

五月）小王子と東行を企て、小王子には本隊をまかせて南よりに東行させ、みずからは別動隊をひきい北方を通つて、まずオイラートの本據を訪れ、オイラートと小王子の連和を策して成功し（二十年初）、更に自らはオイラートの一部の兵と共同して、南下し甘肅邊外に到着した（二十一年頃）と考えられる。

當時のモンゴリアの形勢を見ると、オルドスには西方系出身の套虜がなおかなりの力をもつて居り、その他にも群雄が割據していた。従つてまだそれ程強大な勢力に成長していない小王子軍が東方から西行して見ても、オルドスから寧夏・甘肅方面への交通路が敵側に確保されていては効果は少ない。しかるに別動隊を派遣した北から壓し、西から攻めれば、包圍形となり勞せずしてモンゴリア統一が可能になる。しかもイスマイルは、元來西方出身の仇加思蘭の族弟にあたる所から見て、西方に詳しいと察せられる。したがつてイスマイルを派遣すれば、戰鬪にせよ、懷柔にせよ、西方經略に効果を上げることが期待出来るのである。これらから見れば、この計畫は小王子にとつて最善の策と言わなければならない。

以上の理由から、私は十九年五月の記事は虜酋亦思馬因而逃北小王子敗走が正しいと考えるのである。

次に私のこの説を更に裏書きするものとして、同じ記事の後半についても言及するならば、和田博士は、

虜酋亦思馬因爲逃北小王子敗走。所遺幼稚朵顏三衛携往海西易軍器。

の記事の所遺幼稚を、イスマイルが小王子のために襲破されたと言う立場から、イスマイルが逃げる時にのこした幼稚と解釋され、「思ふに三衛は此の時小王子に黨して、暴横なる亦思馬因を挾撃したものであらう。」と結論づけておられる。もしこの説が妥當なものとすれば、強いて云えば三衛は論功にあずかつてよきようなものである。

しかるに事實は逆である。すなわち、小王子の西行が宣府・大同侵入後一段落した二十年四月には、さきにもあげたように、

朵顏三衛都督阿兒吉蠻等、亦遣使察歹等、上書告急言、克失與小王子連和約束行掠、其部落、將大舉入寇。

とある。この朵顏三衛の報告は、オイラートの克失と小王子が連和して、合同で明邊に入寇するであろうと言うので

あつて、直接朵顏衛と小王子との關係を示すものではない。しかし朵顏衛が小王子の動靜を明朝に報告すること自體、潜在的には、小王子に敵對している明朝に情報を提供することによつて、朵顏衛と小王子とはすでに離反していることを示すものである。つづいて二十一年六月己丑には、

遼東總兵官綏謙等奏、朵顏三衛夷人屢爲北虜侵掠、乃驅人畜、求入塞內避之。

とあり、朵顏三衛が小王子軍に攻められて、終に逃げ場すら失い、明側の塞内にまで逃げ込もうとしていることが知られる。これから後、二十三年には徹底的に攻められ、朵顏三衛は再び故地に歸れなくなり、明邊をさまようようになった。

これらの事實から見れば、十九年五月の記事は、三衛が小王子に黨してイスマイルを挾撃したとは到底考えられない。むしろ所遺幼稚は小王子が遺した所の幼稚で、西行に際して本軍が出發した後、非戦闘員として後部に殘留していた女子供を三衛が襲つて九人を捕獲し、海西女直に賣りに行つたと解すべきであらう。小王子のその後の三衛討伐はこの時の不信をついたものに外ならない。

## 二

以上で私は、成化十九年五月以來小王子はイスマイルを媒介として、オイラートと連和しながら新作戦を展開したことを述べたが、この計畫は成化二十二年七月壬申に、

鎮守甘肅總兵官焦俊奏、哈密都督罕慎、遣人來報、虜酋瓦剌克捨并亦思馬因已死。兩部人馬、散處塞下。

とあるように、イスマイルとオイラート克失の死によつて不幸にも中斷された。そのうゑ二十三年三月には、癸卯の記事に、

巡撫遼東都御史劉滂等奏、卜蘭罕衛與泰寧衛夷人傳報、

小王子已死。

とあり、十九年五月以來の新作戦は、その中心人物である小王子・イスマイル・オイラート克失の三人が殆んど同時に死ぬことになり、最大の危機に見舞われた。特に大計畫で小王子とオイラートを結んで中心的役割を果たしたイスマイルの死は最も大きな打撃であつたに相違ない。この大計畫が僅三四年で挫折するか否かは全く次代の小王子とオイラートの後繼者の力にかつたのである。ただここで問題になるのはオイラートの立場である。實錄成化二十二年七

月壬申には、

鎮守甘肅總兵官焦俊奏、哈密都督罕慎、遣人來報、虜酋克捨并亦思馬因已死。兩部人馬、散處塞下、而克捨部下立其弟阿沙、亦爲太師。阿沙之弟、曰阿力古多者、與之有隙、率衆至邊、欲往掠甘肅且脅罕慎欲與和親。

とあるように、克失が死ぬと、兄弟争が演じられている。

これは克失の死による太師の位をめぐつての争いと思われるが、その裏には克失の定めた基本方針に對する動搖が示されているのである。すなわち十九年以來の小王子とオイラートとの連合作戦は、本來小王子の側から積極的に出されたもので、オイラートは受動的立場にあつた。しかもこの作戦が基礎鞏固なものに發展しないうちに克失が死に、またイスマイルも死んだので、中心人物が失われて残された部衆は恐らく二派に分れたであろう。そして克失の死後においてはむしろ消極的守舊派が勝をしめて阿沙をおしたてて太師とした。これに對して積極派の弟の阿力古多是兄と争つてまで自ら甘肅・ハミ經營に乗り出したものである。二十二年九月己巳には、

哈密都督罕慎、遣使臣火者阿里麻等、來朝貢方物、因奏、

瓦剌阿力古多王欲與和親。<sup>(8)</sup>

とあり、二十三年四月甲戌にも、

巡撫甘肅右副都御史唐瑜等奏、瓦剌養罕王將入寇、哈密罕慎來報、不得利去、養罕王憾之、掠其刺木城、又與阿力古多<sup>(8)</sup>元王合兵謀犯甘肅。

とあり、阿力古多王の積極策は一層明白である。しかも翌月の五月丙寅には、

甘肅總兵官都督周玉等奏、哈密都督罕慎譯報、……阿沙太師、與其平章把禿撒及阿力吉多王<sup>(8)</sup>兀朮捨王等、分駐察罕阿剌帖兒等境、欲入邊剽掠。

とあり、兄弟争も一時的なものに終り、結果的には消極派の阿沙の方が積極派の弟にひきずられたことがうかがえる。ただここまでは、オイラート内部の動搖が治つて一族そろつて甘肅・ハミ經營に乗り出したことが明らかになつただけで、小王子との關係を含めて克失時代の大計畫にまで復するには、なお更に二・三年を要したようである。このことについては次節において小王子の活躍と關聯しながら述べることにする。

### 三

先代小王子が成化二十三年三月の頃死んで、次代小王子が之を襲つた後、始めて實錄にあらわれて来るのは翌年即ち弘治元年五月である。同月乙酉には、

先是、北虜小王子率部落潛住大同近邊、營互三十餘里、勢將入寇。至是奉番書求貢、書辭悖慢、自稱大元大可汗、且期六月十五日齋聖旨來。守臣以聞。下。兵部覆奏謂、北虜雖有入貢之意、然以敵國自居欲與勅書、稱呼之間、似難爲言、一言之間、彼之臣否順逆遂見不可不慮。請集廷臣議。於是、太師英國公張懋等會奏、夷狄者聲教所不加、其僭稱名號自其故態于中國無預、其辭雖若驕倨、然自古御戎、來則不拒、在我先朝亦累賜包容。今彼既在邊候旨。宜降勅大同守臣宣諭、其酋長果誠心入貢則以小王子所遣應入者名數上。請遣內外重臣迎之如故事、若觀望不來亦聽之。仍嚴我兵備相機戰守。從之。

とある。これによれば、小王子はこれまでの入寇を一變して大元大可汗と稱して、入貢に方針を切りかえた。明朝としては大元大可汗の稱號は認めないが、入貢は許可する方針を定めた。その細部に關しては翌六月癸卯に、

巡撫大同都御史許進等奏、自古馭夷之道、未嘗不以懷柔

爲上策。今小王子、以皇上嗣統感恩向化、遣使入貢。……

今其來貢夷人一千五百三十九、馬騾四千九百三十、已暫驗入邊、安置大同館。其入貢人數、乞爲裁定。兵部覆議、宜如其言。令太監金輔・大通事楊銘、往彼譯審。正使副使頭目從人若干及分爲等第赴京。其餘俱留大同、以禮館待、候給賞賜、仍令戶禮工三部、各差官沿途館伴。上是之。使臣令五百人來京。

とあり、一千五百三十九人が馬騾四千九百三十四をひきつれて大同に來たことが知られる。明朝ではその内五百人の來京を許可した。このように小王子と明朝との關係が一變したが、これにともなうその後の小王子とオイラートとの關係については、これまた、これまでの研究と見解を異にする。和田博士は、

明史卷一八二馬文升傳によれば弘治の初年小王子が數萬騎を以て大同塞下に牧し大元大可汗と誇稱したりし時馬文升の之に對する洞察を説いて曰く、

文升謂彼方敗於他部、無能爲、謂密爲備、而揚聲而逼之、必徙去。已而果然。

他部とは果して何物なるか明言せざれども其の瓦刺なり

しは問はずして明ならん。

と述べておられ、<sup>(9)</sup> 彼方と他部を小王子とオイラートに當てられて、その關係は對立戰鬪狀態にあると解されている。しかるに馬文升傳の前文を見ても、

明年（弘治二年）……小王子、以數萬騎、牧大同塞下、勢洶洶、文升以疾在告、帝使中官挾醫視、因就問計、文升謂（以下前掲）

とあり、單に計を問うとだけあつて、これだけでは彼方と他部は判然としない。この頃の實録を見ても、和田博士の説を實證するに足る記事は見あたらない。むしろ同じ弘治二年の正月丙子の記事として、

都察院左都御史馬文升等言、去冬詢問延綏邊情、知虜騎俱在河套近邊牆住牧射獵、通事與語云、明春欲來進貢、切惟此虜部落分散固不足深慮、但我武備不振、芻糧不足、亦所當憂、成化四年虜酋阿樂出・乧加斯蘭、占居河套、犯我邊陲、……、至成化九年冬方逐出套、復犯大同・宣府、又已數年、軍勢于征戰、民困于轉輸、幸而虜賊自相讐殺、邊方稍寧。……今此虜居于河套、不見剽掠、聲言欲貢、意在緩我之兵、即春初進貢、必以往年從榆林由偏頭關而

來爲詞、彼既入貢、餘衆在套、從容就草牧馬、比及彼回、草芽已茂、馬廐已壯、必藉言河冰已開不肯出套、倘乘此入寇、何以禦之、宜勅延綏鎮巡等官操練軍馬、嚴加防禦、令通事與彼講說、既欲進貢、宜早出套從大同赴京、若又<sup>ニ</sup>由榆林爲詞、必大張兵勢、或設奇謀、務逐彼出套、不可容之久住貽患邊方。

とある。これは、套虜のことを言つたものである。關聯記事はここでは省くが、套虜が小王子に對抗するために對中國政策を積極的に打ち出して來たのに對する馬文升の制禦策である。恐らくさきの馬文升傳はこの記事のうち、「此虜部落分散して深く慮るに足らず」とか「幸にして虜賊あゝい讐殺す」とか「大いに兵勢を張り或は奇謀を設けて、務めて彼を逐いて套を出しむ」とかの記事を要約したものであろう。とすると馬文升傳の「彼方敗於他部」の彼方と他部は成化十五年當時の套虜である弘加斯蘭がイスマイルに敗れたことをさすので、他部はオイラトを言つたものではない。<sup>(四)</sup>套虜は當時小王子と對立し、むしろ小王子のモンゴリア統一の第一の討伐目標であつた。従つて、これだけを見ると、小王子とオイラトとが對立状態にあつたとい

うことは明らかでない。兩者の關係は、實錄の後の記事によれば全く異つた展開の仕方をしている。すなわち、小王子が明朝に入貢した後の弘治三年二月癸巳の記事によれば、先是有旨、令迤北及瓦剌進貢使臣人等、迤北許一千一百名入關、四百名入朝。瓦剌許四百名入關、一百五十名入朝。

とあり、オイラトもまた迤北小王子と同様明朝に入貢しようとしている事が知られる。つづいて弘治三年三月辛酉には、

迤北并瓦剌使臣奄克卜花等、貢方物馬匹。賜宴并織金綵幣等物有差。

とあり、また同月己卯には更に詳しく、

迤北小王子使臣奄克卜花等、及瓦剌太師使臣恰恰等、四十八人來貢。并奏乞官職……。賜宴并給冠帶勅書遣之、其賜小王子并太師蟒龍紅纓毼疊帳房等物即付奄克卜花等領回給之。

とあり、小王子とオイラト太師とは同じ時に、恐らく行くをともにして入貢して來たように思われる。

また、弘治三年十一月癸卯の記事によれば、

瓦刺太師、遣使入貢、過脫羅干部、因與其使偕來。

とあり、オイラト太師が小王子配下の脱羅干部を通じて明朝に入貢して来たことがうかがえる。さらに弘治四年二月乙丑には、

迤北伯顏猛可王并瓦刺太師火兒忽刀<sup>山</sup>、遣使臣努力等、來貢。賜宴并綵段衣服等物有差、仍回賜其王及太師以下綵段衣服等物如例。

とある。この迤北伯顏猛可王とは小王子と考えてよい。そのことは關聯記事である三月辛巳に、

迤北小王子并瓦刺太師火兒古倒溫等<sup>山</sup>及其貢使捏列忽等奏、乞別賜蟒龍衣服金銀酒器及諸用物。

とあり、同月丁亥にも、

陞授迤北并瓦刺貢使官職有差。

の記事がある。これら一連の記録から見ると、弘治三・四年の頃には小王子とオイラトは共同して、同時に使臣を明朝に送つたものと解される。またこれらの朝貢記事の間すなわち三年九月乙卯には、

兵部言、迤北小王子前此有遣使入貢之奏、又傳有構結瓦刺、逼脅三衛、來寇之謀。

とある。この傳聞は内容においてどれ程信實性があるかは別問題としても、小王子とオイラトとが對外關係においては歩調をそろえていることがうかがえるのである。

つぎに弘治五年以後についてもふれるならば、和田博士は、

實錄弘治六年六月戊子、甘肅鎮巡等官太監傅惠等の奏の中に明白に、「況今北虜部落被瓦刺殺散、住牧寧夏賀蘭山後」と見ゆ。當時明朝の論客が瓦刺をのみ戒心して甚だ韃靼を輕視せし事は既に述べたる所。

と述べておられる<sup>山</sup>。和田博士の小王子は韃靼なりと言う論法から推せば、この記事の北虜は小王子であり、小王子とオイラトとが争つたように解される。しかし實錄で單に北虜と言つた場合は内容が複雑で直ちに小王子と斷定することは危険である。この場合の北虜はおそらく、當面小王子に敵對していた群雄の一つをさすので、オイラトが西方から南下して破つてくれた一群であり、それ故にこそ翌年になつて小王子は始めて、當時としては七萬騎という大軍に成長して賀蘭山後に潛住することが出来たのである。すなわち、實錄七年十二月己卯には、



勅甘肅鎮巡等官賑恤甘涼等處邊軍之被寇掠者。勅曰。：

：近聞、虜酋小王子人馬、潛住賀蘭山後。

とあり、同月辛巳にも、

兵部奏……諜報、虜衆七萬住牧賀蘭山後。

とある。これらから見ても小王子とオイラートの關係は和田博士説の如くではなからう。最後に兩者の關係を知るのに興味深い上奏文をあげよう。弘治八年二月甲戌に、

山東袁州府推官丁伯通上疏言三事（中略）一制夷狄、謂瓦剌精兵數萬、豈無窺覷中國之心、特以小王子部落隔絕其間、往來必假道、而後得入、朝廷能與小王子通和、若漢之呼韓唐之突利、使爲外藩、瓦剌雖強、豈能越小王子而入哉、若嚴絕之、或與瓦剌合而爲一、其爲中國之憂甚矣、……

夷狄入貢、實懷窺覷之計、莫若倣前代之法、就於近邊之地、特立互市、凡賞賜宴撈之類、預爲之備、若其來朝、卽命彼處大臣館之、不必親至京師、如此既可以省我道路之費、亦可以通彼向化之心、而其窺覷之萌亦可潛消矣。とある。これによれば、當時オイラートは精兵數萬を保有して強大であり、中國に入貢する時は小王子の勢力圏を通

過して來ていたのである。ただ中國の立場から言えば、強大なオイラートが何時また中國に大舉入寇してくるかわからないから、今のうちに對オイラート政策を確立しておく必要がある。それにはオイラートと中國との間には小王子部が介在しているが、この小王子を懷柔して漢代匈奴の呼韓邪單于や唐代突厥の突利可汗のように外藩となせばよい。その具體的な方策の一つとしては邊境地帯に互市を立て賞賜宴撈を充分にすればよろしい、と言うことになる。このように北方民族の離間策が取り上げられること自體、當時の状態では小王子とオイラートの共同進入の危險性を前提としていたのであつて、兩者の親近性の強いことを裏書きしているものであろう。またこの上奏文は、その處置として「疏上命所司詳議以聞」とだけあつて、具體的には何ら明示されていないし、その後においてもこの策が實際に採用されて効果を収めた様子はない。このことは、離間策とか懷柔策は、ほんらい呼韓邪單于とか突利可汗の場合のように、北方民族自體が分裂の過程にあるとき適用されて始めて効果のあるもので、この場合には不適當であることを意味している。すなわち上奏者の丁伯通は現象の相似性に

のみとらわれ、當時の北方民族の本質的な面をきわめなかつた結果、このような上奏をしたものであろう。従つて、このことから當時の小王子とオイラートの關係は、分裂的ではなくて協調的であると言いうる。

### むすび

本稿においては明代後期活躍した小王子のうち、そのものつとも重要な時期と思われる成化・弘治の間の動靜を、主としてオイラートとの關係において考察してみた。ただこの時期はモンゴリア自體が諸勢力に分裂しているのみならず、根本史料である明實錄の記錄もまた錯雜して、はなはだ理解に苦しむのであるが、諸種の鈔本を検討し、史料を整理してみると、小王子はモンゴリア統一の出發期にあつて、これまで行動を共にしていたイスマイルと相争い、オイラートとも對抗的立場を取つたというこれまでの説とは異つて、成化時代の小王子は初めイスマイルの指導を受け、十九年以後は分離こそすれ協調して活躍した、そしてイスマイルの畫策によつて、オイラートとも共同作戰をとる大計畫を樹立し得た。次代弘治の小王子もイスマイルの

死後とはいえ、その方針を受けつぎ、オイラートと共同して事にあたつたことが知られる。ただオイラートはこれまでの研究の通り、當時も明初の形態を持続していたと思われるので、相對的にみて、小王子の性格は明代前期のタタールとは非常に異つたものといふことが出来る。なお弘治年代に關しては、小王子とオイラートの協調性親近性のみを取扱つたが、これは從來の説との相違点をあげて批判をおおぐのが順序と思われたためで、私の主眼點とするところは、むしろ成化時代の小王子の打ち立てた大計畫が弘治時代に至つていかに遂行されたかにある。この點に關しては、小王子とオイラートが親近性を軸として、一方ではそれぞれ獨自にモンゴリア經略と甘肅・ハミ方面の經營に努めたことを述べたかつたがこれは他日にゆづることにする。

### 註

(1) 萩原淳平「土木の變前後」(東洋史研究第十一卷第三號)を參照されたい。

(2) 「全邊略記」・「五邊典則」・「名山藏」に關しては、便宜的に出版年月日順にしたが、内容の成立年代とは必ずしも一致しない。また「明史」韃靼傳や「殊域周咨錄」韃靼傳などには該當記事が缺けている。これら諸史料については稿を改めて資料批判を

するつもりである。また蒙古側の史料である「蒙古源流」の所説とも相違する所があるが、「蒙古源流」の資料批判も他日行うつもりである。

- (3) 三田村泰助「明實錄の傳本に就いて」(東洋史研究第八卷第一號)

淺野忠允「明實錄雜考」(北亞細亞學報第三輯)

- (4) 本來實錄には追記などはあるべき性質のものではない。しかるに明實錄約三千巻を通じて、この時代に限つて僅ながら存する。恐らくこれは實錄編纂官が當時の大事件としてはよくわけにはいかないが、眞相とあまりにかけはなれた報告書をそのまま記載することも出来ないで窮餘の策として追記を加えたものである。それならば追記のないものはすべて眞實と見なしてよいかといえ、必ずしもそうとは限らない。詳しい戰鬪とか戰果が述べられてあつても、それが眞實でない場合は、數ヶ月あるいは何年か後に修正記事が記載される。ときには、それすらはぶかれていると想像されるものもある。これは當時地方政治が弛緩したにもかかわらず、監察制度がまだ強化されていらないことによる混亂であろう。それがそのまま實錄の錯雜を示していると見てよい。なお監察制度が強化されてからは、實錄の體裁も、事件のあつた時は簡単に記され、詳細は監察系統の正しい報告をまつて記載されるようになるのが特徴である。

- (5) 實錄成化十九年七月己未、

命保國公朱永佩鎮朔大將軍印、充總兵官、將兵出大同征虜。時邊報復急。故命永往擊之。仍勅太監蔡新、監督軍務、右僉都御史郭鏜贊理軍務。

- (6) 實錄成化十九年九月甲辰、

鎮朔大將軍保國公朱永奏、虜酋遠逼近邊無警。

- (7) 克捨は克失の音通で、同一人物と見てよからう。

- (8) 阿力古多、阿力古多兀は、發音の關係で多少異つてゐるが同一人物と見てよからう。阿力吉多の吉は古の誤寫でこれまた前後の事情から同一人物と見てよからう。

- (9) 和田清「內蒙古諸部落の起源」目黒書店

- (10) 經世文編の馬文升の所をしらべても、弘治二年前後のものとしては、「爲驅虜寇出套以防後患事疏」として、本文中の實錄の記事の最初の部分の去多を弘治元年十二月十七日にある記事が見られるが、これにも「驅虜出套」という副題が着いてゐる。ように套虜のことを言つたものである。

- (11) 火兒忽刀と火兒古倒溫は音通で同一人物と見てよからう。なおこの火兒忽刀と(8)の阿力古多とは音の點からは同一人物と見なすことには多少無理があると思われる。しかし、僅三四年のことではあり、しかも憲宗實錄と孝宗實錄とで編纂者も異つて居ることではあり、その相違があらわれたとすれば同一人物とも考えられる。いずれにしても前後の事情から見れば、同一政策を取つてゐるものと考えられる。

- (12) 和田清「內蒙古諸部落の起源」

- (13) ウラヂミルツォフ「蒙古社會制度史」外務省調査部

## 附記

本稿において、私が引用した實錄記事は、すべて京都大學文學部編「明代滿蒙史料」(明實錄抄)にもとづいたものである。

of family system during the Han dynasty was the three-families system, but I must confess that his theory is already untenable in the light of the more detailed study which I hope to have attempted in this paper.

**The Relation between the Population Registers in the Liang Wei 兩魏  
Period with the Labour Conscription Record in T'ang 唐, and  
the Changes in the Sense of K'o 課**

*Shizuo Sogabe*

Many population registers have been discovered at Tunhauug 敦煌 and reviewed in the academic journals, but we have not found the account of corvée in these documents yet. However, the description of corvée can be found in the register documents of the Liang Wei period which have also been discovered at Tunhung and have recently come to our knowledge through the journals.

The present paper is an attempt to elucidate the difference in connection with the labour conscription record in T'ang, and the changes in the sense of k'o.

**A Note on Hsiao-Wang-Tzu 小王子**

*Junpei Hagiwara*

The word hsiao-wang-tzu designates the whole heads of the tribes which were active in Mngolia in the late Ming 明 period. Dayan Khan and Altan Khan were their successors and one of their clans unified Mongolia. It has been said that the hsiao-wung-tzu tribe was engaged in constant struggle against the Oirats in the process of unification of Mongolia. But according to Ming Shih Lu 明實錄 (The Veritable Records of the Ming Dynasty), the hsiao-wang-tzu kept intimate co-operation with the Oirats through of Ismael in the formative period of the Ming Empire. The situation is made clear not only in the civil war in Mongolia but in its relation with China. The character of hsiao-wang-tzu was different from that of the head of the Tartars at the beginning of Ming.